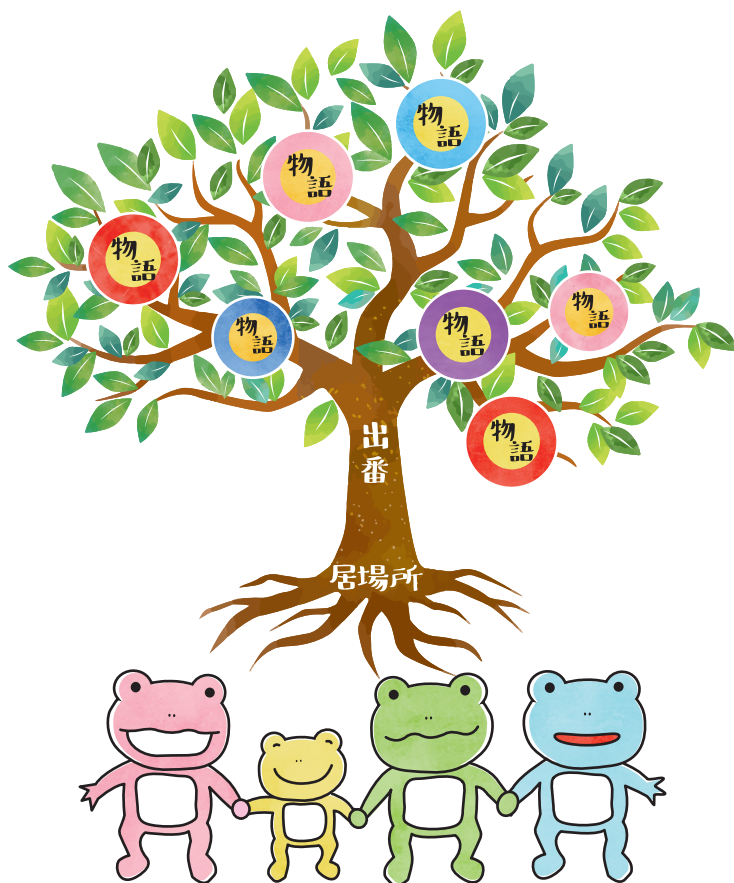


# 教室は、ふたつめの家族

識字・日本語学習における～居場所・出番・物語～



## はじめに

識字・日本語教室では、かつて差別や貧困のため十分に学校教育を受けることができなかった人、外国から結婚のためや仕事を求めて日本に来た人、そして義務教育は終了したけれど、十分に学ぶことができなかった人が、さらに学びを続けるために参加しています。

2021年度はコロナウイルスの広がりが収まらず、識字・日本語教室の活動にも大きな影響が出ました。しかし、そのような状況のなかでも、多くの教室において学習者、学習パートナーが力を合わせ、可能な形で学習活動を続けてきました。

教室では、単に言葉の学習をするだけではなく、自分たちの生活をより豊かな、そしてより確かなものにするため、さまざまな形での学習が行われています。教室を出て体験的な学習をすることもあります。他の教室で学ぶ多くの人たちと交流し、自分たちの学んだことを交流し、学びをより豊かなものにする取り組みもあります。

なかでも大切にしてきたことの一つに、文章を書く、ということがあります。自分の生活を振り返る、自分の住む社会のありようを見つめる、いま社会で起こっていることを考える、そしてそれらのことを文章につづる、といった営みがなされてきました。本冊子では、学習者の書かれたそのような作品も載せています。

この冊子で報告しているのは2021年度に文化庁の委託事業として実施された「教室ボランティアの人権意識調査に基づく学習・研修プログラムづくり」事業の取り組みの一端です。この冊子が、少しでもみなさんの識字・日本語学習の参考になり、より充実した内容の取り組みがそれぞれの教室でなされるようになれば幸いです。

2022年3月8日  
識字・日本語センター  
事務局長 丸山敏夫

# もくじ

はじめに

この冊子を読んでもくださるみなさんへ……………1

識字・日本語学習で大切にすべきことは?……………2

[いろいろな教室]浅香識字・日本語教室……………6

[いろいろな教室]加島識字学級……………10

識字・日本語学習を必要とする人は?……………14

[いろいろな教室]住吉輪読会(土曜日)……………17

[いろいろな教室]高砂日本語教室……………21

ボランティアの役割とは?……………26

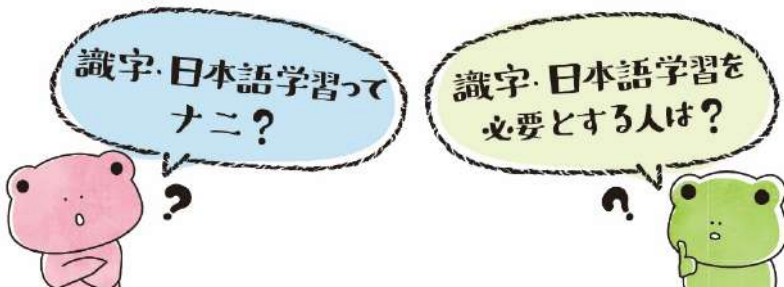
[いろいろな教室]しきじ・にほんご天王寺……………29

[いろいろな教室]日之出よみかき教室(木曜日)……………33

識字・日本語学習における「居場所・出番・物語」……………38

識字・日本語センターとは?……………44

おわりに……………45



## この冊子を読んでもくださるみなさんへ

いまの識字・日本語学習はどんなふうに行われ、どんな課題をもっているのでしょうか。このことを多くの人に知っていただきたくて、この冊子につくられました。この箇所では、この冊子の構成や読者へのお願いを述べておきたいと思います。

この冊子は、ひとつには大阪の識字・日本語教室をめぐる状況や課題、ふたつめには人権学習モデル教室(2021 年度文化庁委託事業)として協力いただいた大阪府内の 6 教室とその活動を取り上げています。

ひとつめの 識字・日本語学習をめぐる状況や課題に関する内容は、「識字・日本語学習で大切にすべきことは?」、「識字・日本語学習を必要とする人は?」、「ボランティアの役割とは?」の 3 つにわけて書いてあります。大阪を中心に日本における識字・日本語学習の課題を取り上げようとしてしました。

ふたつめの 教室の学習例としてあがっているのは、「はじめに」でもふれた事業のなかで人権学習モデル教室となった 6 教室の取り組みです。それぞれの教室の成り立ちと学習例を紹介し、学習者の作品やプロフィールなどを紹介しています。

さいごに「識字・日本語学習における居場所・出番・物語」という文章を置き、全体をまとめようとしてしました。

書かれている順番通りに読んでいただいてもかまいませんし、教室や学習者の紹介をまず読み進め、その後に状況や課題を読んでいただいてもかまいません。両方を読むことにより、識字・日本語教室をめぐる課題と、教室が取り組んでいる活動の意義がわかりやすくなるものと思います。



## 識字・日本語学習で 大切にすべきことは？

### 識字・日本語学習ってナニ？



識字は、もともとはよみかきの学習を意味します。日本で生まれ育って幼い頃から日本語を話していれば、多くの人はおしゃべりできるようになりますが、学校などで系統的に学ばなければ、確かなよみかき能力は育ちません。ただ、日本の学校のようなやり方では、おとながよみかきを身につけることはできないものです。では、おとながよみかきを学ぶにはどんなやり方がふさわしいでしょうか。

### おとながよみかきを学ぶにはどんなことが必要？

ひとつは、くらしに結びついた学習をすることです。生活に関係のないことばをいくら学んでも、なかなか身につくものではありません。普段のくらしでくりかえし必要になることは、学びやすく、覚えればなかなか忘れないものです。

もうひとつは、問題解決に通じる学習をすることです。自分が抱えている問題を解決するために必要な事柄を取り上げて学べば、学習内容は身につきやすくなります。

くらしに  
結びついた  
学習

問題解決  
に通じる学習

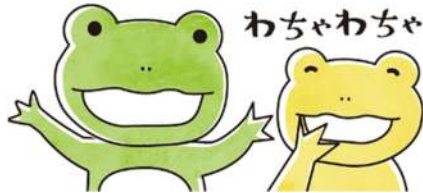
さらに、教え込みではなく、自分の気持ちや疑問などを発信するような学習が成果を上げやすいと言えます。くらしの中でふと感じた疑問や、驚いたことなどがあれば、それをつづる学習が意味を持ちます。



こう考えれば、おしゃべりを基本にしながら日頃感じていることを出し合い、それを土台にして学んでいくという方法がぴったりだということになります。おしゃべりは日本語の特性にもかないます。

## 日本語はおしゃべりが簡単

日本語ということばは、おしゃべりは比較的かんたんなことです。その理由はいろいろとあります。たとえば、音の種類が少な



いことです。日本語は母音が5、子音が10あります。だから基本的には50音の仮名文字で、ほとんどの音をあらわせます。韓国・朝鮮では、数え方にもよりますが、母音が21、子音が19あります。掛け合わせれば399の音があることになります。中国語や英語でも、日本語よりかなり多くの母音や子音がありますから、日本語を母語とする人がこれらの外国語の会話を学ぶのは大変です。その一方、海外から来た人が日本語を学ぶとき、身につける必要のある新しい音は少ないのです。

理由の二つめは、日本語では語順が厳密に決まっていないことです。特におしゃべりではこの傾向が強いと言えます。「わたしは今日、梅田まで買い物に行きました」は「梅田まで買い物に今日わたしは行きました」でも、「買い物に梅田までわたしは今日行きました」でもかま

いません。おしゃべりなら、「今日買い物に行きました。梅田まで」でもいいでしょう。英語などの場合は、語順が文法的に決まっています。それに対して日本語は、語順の影響が少ない言語なのです。

日本語が難しくなるのは、よみかきに入ってからです。しかも、ひらがなやカタカナだけなら、あまり難しくありません。日本では小学校1年生から文章で日記を書けます。小学校1年生でも日記が書けるのは、ひらがながあるからです。

## 生活体験や思いを表現する学習を大切に



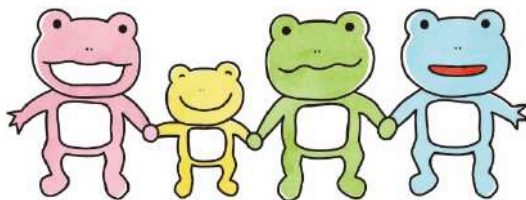
こう考えてくると、生活体験や思いを表現する学習を大切にする方が得策だということがわかります。学習者が日常生活のなかで周りの人たちと日本語で会話したいという思いをもっているなら、なおのことおしゃべりなど自己表現を大切にしたい学習が望ましいと言えます。

文章をつづる場合も、自分の経験をつづることを大切にすれば、文章を書くことが苦手にはなりにくいと言えます。自分の経験をつづるには、日頃ないことを選んで書くのがやりやすい道です。うれしかった、悲しかった、悔しかった、びっくりした、などなどの感情が沸き起こったもとの体験をつづるのです。その感情が引き起こされたもとの体験を、起こった順序通りに書いていく方法が適しています。それにより、読み手には書き手の気持ちも想像しやすくなります。

教室で共同の体験をすることを大切にしていれば、そのような機会は増えていきます。たとえば、教室として地域のイベントに出し物をするとか、教室のメンバーが一緒になって共同作品をつくるとか、全体学習をしてみんなで話し合ったり、問題意識を深め合ったりするなどです。



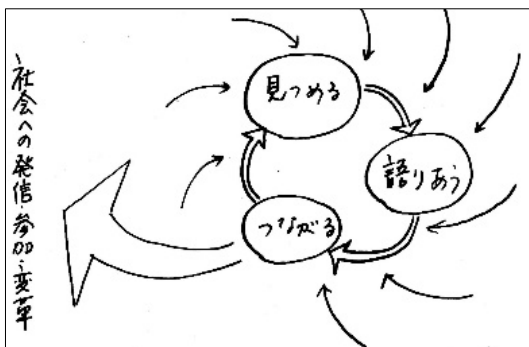
## つながるための学習



このように識字・日本語学習の特徴を見ていくと、識字・日本語学習が「よみかきことば」そ

れだけを身につけるというよりも、他の人とつながるなかで「よみかきことば」を身につけていくと考えた方が適切だと言えます。

このことをわかりやすく示しているのが、次の図（右図）です。学習のなかでは、自分の生いたちや暮らしを見つめることが大切になります。自分の生いた



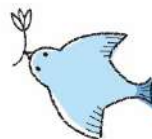
ちや暮らしをていねいに深く見つめられていればいるほど、問題意識がはっきりしてきます。見つめて見えてきたものをつづったり語ったりすることにより、問題が自分だけのものではないことがわかってきます。他の人のくらしや思いを知ることで、自分の暮らしもより深く見つめられるようになります。こうして人と人との絆が強まります。外側から中へと向かう矢印は、日頃のおしゃべり、全体での学習、地域行事への参加、文集の作成など、教室に関わるあらゆる活動をさします。それらにより、このサイクルをしっかりと回すことを目標に展開することが望めます。このサイクルがしっかりと回っていると、外に飛び出す太い矢印のように、社会に向けて発信したい事柄も自ずと出てくるものです。





# 生活をつづろう

## 浅香識字・日本語教室



浅香識字・日本語教室は、大阪市内にある被差別部落の識字学級です。現在教室は、外国から仕事や結婚で日本に来て生活している人たちが参加しています。日常生活に必要な日本語の会話の学習からはじめ、文字の読み・書きを学習する場になっています。



新型コロナウイルス感染拡大のため、教室は長い間休講が続きました。その間に識字・日本語センター主催の人権学習教材持ち寄りワークショップに参加しました。他の教室から、休講中に教室から『たより』（通信）を出し、参加者同士のつながりづくりをしているという報告がありました。早速、浅香の教室でもやってみました。休講中に教室参加者に『たより』を郵送します。そしてそれぞれの近況を返信してもらいます。それをとりまとめて改めて教室の『たより』として郵送しました。それぞれの生活をふりかえり文章を書いてもらいました。

教室が再開してから、この取り組みをさらに発展的にやろうということになりました。まず、学習者と学習パートナーとで、自分のふるさとのこと、そこでの生活について話し合いました。これまでの生活の中で、また、今の生活のなかで、自分の人権が侵されるようなことはなかっただろうかということを中心に考えながら文章にまとめました。文章は、書いて終わりではなく、教室のみんなの前で発表しました。その文章の一つを紹介します。



け	り	こ		生	か	た	の	卒
れ	来	こ	リ	活	っ	。	家	業
と	私に人	は	ノ	で	た	始	に	し
話	は日本語と	許	ホ	し	の	め	行	て
した		さ	リス	た	で	は	き	勝
こ	家族	れ	ス		買	日	日	母
と	が	な	で		い	本	本	の
は	話	か	は		物	語	人	バ
あ	して	た	家		も	が	の	ス
り	い	の	庭		指	話	制	ト
ま	る	で	内		さ	せ	衣	ス
せ	の	す	で		し	は	系	に
ん	を	と	日		て	い	工	住
で	聞	こ	本		受	し	場	ん
し	い	ろ	語		け	に	に	ご
た	て	が	を		取	分	勤	い
	い	日	話		よ	か	め	る
	た	本	す		う	ら	ま	叔
		か			な	な	し	母

より(日本人町)

す

あは

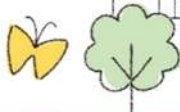
Bさんは、叔母の勧めで、日本語をならっていましたが読み書きはあまりできませんでした。

来日後、病院でヘルパーの仕事をしながら介護ヘルパーの勉強をしました。そして介護ヘルパーとして働きましたが不景気で仕事を失いました。当時、仕事に必要な報告書を書けず、日本語学習の必要性を感じて教室通いはじめました。教室に来られた当初は、自分の名前も漢字で書けませんでした。



オ	し	そ	た	で	そ	つ	叔	お
で	て	し		は	の	か	母	は
来	い	て		ポ	後	け	は	
日	る	、		ル	結	と		若
し	こ	成		ト	婚	な	私	
ま	と	長		ガ	し	た	に	
し	や	し		ル	、	か	日	
た	日	に		語	三	も	本	
	本	長		で	人	し	語	
	へ	男		話	の	れ	を	
	の	が		す	子	ま	学	
	憧	日		こ	に	せ	ぶ	
	れ	本		が	恵	ん	よう	
	が	で		多	ま		に	
	後	仕		く	れ		話	
	押	事		な	家		し	
	し	を		り	庭		ま	
	し			ま			した	
	て			し				
	52							

おは、若い私に日本語を学ぶように話しました。



現在は、自分の気持ちや生い立ちを文章にし、いろいろな集会で発表しています。

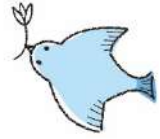
教室では交流会などのときに、ふるさとのブラジル料理をふるまってくれます。





# わたし、病気しないので！

## 加島識字学級



加島識字学級は、大阪市内にある被差別部落の識字学級です。教室には、現在、地域のグループホームに暮らしている人、仕事などでベトナムから来阪している人、中国から仕事や結婚で来阪している人が学習者として参加しています。



全体学習として行った「私、病気しないので!」を紹介します。これは、文化庁が提供している「生活者としての外国人のための日本語教育」プログラムの中に出てくる病院の単元がヒントになっています。そのプログラムでは、どちらかと言えば、病院に関わる日本語の単語をたくさん覚えることが最終目的のようになっているのですが、ここではお互いの病院体験を出し合い、解決の道を探ろうとしました。

ポイントにしたのは健康保険です。健康保険があるかどうかによって、病院に行きやすいかどうかが変わります。他にも課題はたくさんあると予想できたので、それらを出し合って解決策を探ることにしました。

学習者に次の3つの項目について書いてもらい、みんなで話し合いました。学習パートナーには事前に、「社会保険」と「国民健康保険」の説明資料を渡して内容を理解してもらいました。

### ● 病気になったら……

1. 体調が悪かったり病気になったりしたことはありますか。
2. その時、どうしましたか。
3. 困ったのはどのようなことですか。



学習活動から、いろいろな学習者の経験や  
思いが出されました。そのうちのいくつかを紹介  
します。

まだ日本に来て2か月なので、私もふたりの子どもも病気し  
たことがない。悪くなった時のためにベトナムから薬を持って  
きている。病院に行かなければならなかった時は、  
どんな病院がいいかわからないので近所で知り合いに  
なったベトナム人に相談する。(ベトナム人女性 A さん)



骨折して入院しました。3週間入院して専門学校も休  
みアルバイトもできませんでした。ベトナムのお母さん  
からお金を送ってもらいました。(ベトナム人女性 B さん)

子どもに熱が出たことがある。子どもをあず  
かってもらえず、世話をするために仕事を休ま  
ないといけなかった。(ベトナム人女性 C さん)



日本で病気になったことがない。もし病気になったら  
会社の人に連れて行ってもらおう。(ベトナム人女性 D さん)

歯が痛かったので自分で調べて仕事を休んで病院  
に行った。症状を医者によく説明できなかった。

(ベトナム人男性 E さん)



寒くなると足が痛くなります。病院での説明がよくわかりませんでした。(ベトナム人男性 F さん)

体の調子が悪い時、インターネットで病院を探しました。皮膚科に行ったが病気の症状をうまく伝えることができなく、また医者のことばが難しくてわからなかった。(ベトナム人男性 G さん)

お腹が痛くなり、会社の日本語がよくわかるベトナム人の女性の方に病院へ連れて行ってもらった。会社は 1 日休んだ。2,400 円支払った。ずいぶん高いと思った。ベトナム阪神の組合から後日返金された。(ベトナム人男性 H さん)

数年前、日本に来たばかりの時、保険に入っていなかった。胃が痛くなり病院で見てもらったら2万円かかった。今は保険に入っている。新型コロナウイルスのワクチンを打ったあと、39 度の熱が出た。病院へ行き、処方箋をもらった。擬態語が使えず、痛みとか症状を医者にうまく伝えることができなかった。

(中国人男性 I さん)



新型コロナウイルスワクチン接種後、38 度の熱が出て解熱剤を飲んだ。会社の同僚と大阪中央病院に行ったが、ちゃんと症状を伝えることができなかった。(中国人女性 J さん)

25 歳まで両親と遠い岡山大学付属病院に通っていた。今は尼崎の病院へ通っている。今は国民健康保険に入っているが給料が少ないので毎月の支払いが厳しい。(日本人女性 K さん)



## ふだんの 教室

ふだんの教室では、それぞれの課題にあわせて学習者と学習パートナーがペアになって学習をすすめています。

定期的に、教室参加者みんなが交流したり、互いの経験に学び合う機会として、全体学習もしています。全体学習では、ときには学習パートナーがギターを弾きながらみんなで歌を歌ったり、またあるときには一つのテーマについて考えて発表しあったりしています。



## 学習を 終えて

今回のこの学習活動は、識字・日本語センターが行った“人権学習持ち寄りワークショップ”（2021 年度実施）で知った学習活動を教室の現状に合わせてアレンジして実施しました。

学習者全員が自分自身のことを話すよい機会となりました。

学習活動を通じて思ったことは、ほとんどの人がこれまで病院で症状をうまく伝えることができなかったということです。また医者のごことが難しいと受け止めていました。

体の調子が悪くなった時は誰もが心細くなります。元気を取り戻すためには横のつながり（会社の同僚や識字のなかま）をしっかりとつくるのが大切だと改めて思いました。



## 識字・日本語学習を 必要とする人は？

### 識字・日本語学習を必要とする人は？



日本には、十分「よみかきことば」を学ぶことができず、おとなになってから学んでいる人がたくさんいます。大阪府内にも、そのような人たちの学ぶ教室が200以上あります。学習者としてそんな教室に参加しているのは、いろいろな人たちです。まず、子どもの頃から日本で暮らしてきたけれども、学校に行けなかったおとなたちがいます。戦争や差別、貧困や病気、障害など、学校に行けなかった背景はさまざまです。

2010年の国勢調査によると、全国の未就学者は128,178人で、あるのに対して、大阪府の未就学者は12,195人で、全国の1割近くです。これは全国で1番多い数字であり、2番目に多い北海道(7,374人)や3番目に多い東京都(7,244人)の1.7倍以上です。

全国の未就学者  
**128,178人**

全国の  
**1割程度**

北海道、東京の  
**1.7倍以上**

未就学者の多い順

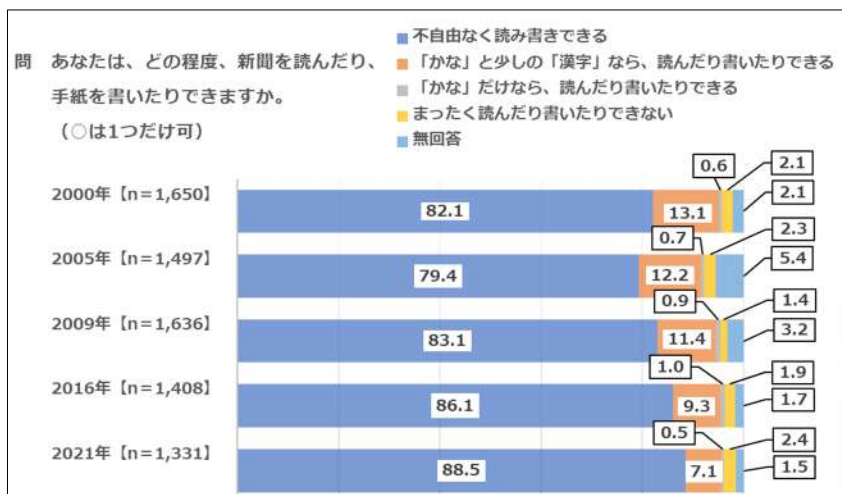
**1番目 大阪府 12,195人**

**2番目 北海道 7,374人**

**3番目 東京都 7,244人**

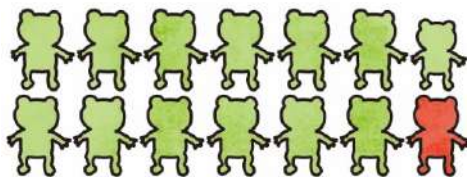


大阪府東大阪市が5年に1度ほど市民によりみかき能力をたずねる調査をしています。その結果によると、調査時期による違いもありますが、だいたい85%程度の人は十分なよみかき能力があり、残る15%ぐらいの人は十分なよみかき能力をもっていません。15%といえば、40人いればそのうちの5人ぐらいが当てはまります。子どもの頃のことを考えてみれば、1クラスのうち4～5人ぐらいが十分なよみかき能力を持っていないという可能性があることになります。



東大阪市 2000,2005,2009,2016,2021 年度  
東大阪市政世論調査報告書より筆者編集

最近では、不登校で学校に行っていない人が増えつつあります。大阪府内で見ると、2020年には14,325人の小中学生が不登校です。これは全国(196,127人)の7.3%で、全国の不登校児童生徒のうち13.7人にひとりが大阪府内にいることになります。



全国の不登校児童生徒のうち  
**13.7 人にひとりが大阪府内**

しかもこの比率は大阪府内では特に高まりつつあります。2019年から2020年の1年間で全国の不登校児童生徒は8.2%増えたのですが、大阪府では14.8%増えました。

**2019年から2020年の  
大阪府の不登校児童生徒数**

**14.8%増**

全国の不登校児童生徒は 8.2%増

海外から日本に来ている人たちは、2020年末で2,887,116人でした。このうち253,814人(8.8%)が大阪府内にいます。大阪府の外国人数は、東京都(560,120人)や愛知県(273,784人)に次いで多く、全国の都道府県のなかで第3位です。

全 国		2,887,116 人
1	東京都	560,120 人
2	愛知県	273,784 人
3	大阪府	253,814 人

こんなふうに、大阪は、「よみかきことば」の学習を求めているであろう人が数多くいます。では、それらの人たちのうち、どれぐらいが識字・日本語教室に来ているのでしょうか。

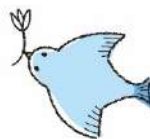
大阪府は、数年に1度ずつ、大阪府内にある識字・日本語教室の数や学習者数を調査しています。今学習者の多くを占めているのは外国人なので、外国人全体の数と教室に来ている学習者の数を比べてみましょう。大阪府が2020年に行った調査によると、学習者として在籍しているのは3,715人です。大阪府内に住む外国人が253,814人ですから、外国人のなかで教室に来ている人は1.5%です。識字・日本語教室以外にも学ぶ機会がありますし、外国人すべてが「よみかきことば」の学習を必要としているわけではありませんが、1.5%というのはどう考えても低いといえるでしょう。

<b>大阪府外国人登録者数 253,814 人</b>
<b>外国人学習者数 3,715 人 (1.5%)</b>



# 人権カルタをつくろう！

住吉輪読会(土曜日)



住吉輪読会(土曜日)は、大阪市内にある被差別部落の識字学級です。教室は、すみよし隣保館 寿という施設で開催されています。

住吉輪読会は、大阪市内の識字学級では一番古く、1966年から続いています。九州の筑豊で始まった識字運動に学んで、大阪で広げようとしたのです。輪読会という名前そのものがめずらしいといえます。これは、みんなで文章を読み合わせて学ぶことを大切にしようとしてつけられた名前です。後には、学習者の書いた作品を教室のみんなで読み合わせることにへとつながっていきました。



住吉輪読会は、教室活動にさまざまな工夫をしてきたことでも知られています。たとえば、1973年頃から通信制の識字活動を行ってきました。仕事などの都合でなかなか教室に来られない学習者に向けて教材を届け、それを空いた時間に書き込んで、また教室に届けてもらうのです。教材を地域内の全戸に配布していたこともありました。これは、親と子をつなぎ、学校と家庭をつなごうとする取り組みでもありました。

住吉輪読会には、初期のころからずっとここで学んでいる人たちもいます。一時期、輪読会の参加者は減っていき、二人や三人になっていたこともありました。そういうときにも、その人たちは「識字の炎を絶やしてはいけない」と踏ん張りながら活動していました。この努力は実り、その後輪読会は教室数も増えていくことになります。

現在、この施設では、住吉輪読会(水曜組)、住吉輪読会(土曜組)、住吉日本語教室の3教室が活動しています。教室の学習活動、参加



者は異なります。その3教室共同で人権カルタづくりをしました。

## 人権カルタをつくろう！

人権カルタづくりに取り組むきっかけは、学習者Kさんの「3教室で何か一緒に作ろうや！」という提案からでした。Kさんも、輪読会の初期のころからずっと教室で学んでいる学習者の一人です。現在では、生いたちをつづる一方で、詩を書いたり、俳句や和歌をつくったりしています。そんなKさんは、3つに分かれないまの輪読会に、共同活動が必要だと考えたのです。



輪読会の3教室は、同じ施設でそれぞれ開催していますが、異なる曜日や時間帯に開かれているため、なかなか交流の機会がもてませんでした。さらに、新型コロナウイルス感染拡大のため、いっそう交流の機会が少なくなりました。それならば、3教室で、同じテーマで何か作品づくりができないかとKさんが考え、提案してくれたのです。



提案後、教室は、新型コロナウイルス感染拡大により休講が続きました。Kさんはその間自分で何枚かカルタを作成していました。3教室の学習者が作成しやすいように、参考にしてもらおうと思ったからです。

そのカルタを参考にしながら、教室が再開してから、3教室の参加者に説明し、さっそく準備をはじめました。

各教室で説明をすると、「人権をテーマにしたカルタって難しそう…」そんなふうに思っている人もいました。でも、本当は、人権って難しいこ

とではなくて、自分にとって大事なもの。また、日々の暮らしの中に「当たり前のようにあるもの」です。そのことに気づくことが大切です。今、当たり前のようにある人権は、昔は当たり前だったのでしょうか。もしも「むずかしそう」と感じるなら、なおのこと、カルタをつくるなどして「人権は身近なものだった」と気づいていくことが大切になります。

カルタづくりは、いまの暮らしが当たり前になるまでの経緯や運動などについて考える機会にもなりました。

施設には、輪読会が 1997 年につくった「住吉輪読会カルタ」を展示しています。

そのカルタは、輪読会のこと、日々の暮らしのこと、仕事のこと、運動のこと、健康のことなどユーモアをまじえながら書かれていきます。そのカルタを教室参加者と見に行って、ああ気づかなかったけどこれも人権だなあとイメージを持ってもらい、作成にうつりました。

1997年に作成されたカルタは、堅苦しい内容ではありません。そのときのカルタには例えば次のようなものがあります。

㊦ のしくやってる ミシン掛け

㊧ んせいも

ともに勉強しなはれ 輪読会

㊨ くらうよ みんなで楽しい輪読会

㊩ くしては おぼえられない

文字の道 それでも楽し 輪読会



今つくりつつあるカルタも、堅苦しい内容ではなく、日頃の暮らしから出発するものにしたいと言っています。



1997年  
作成



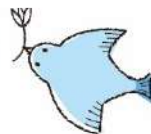
作成中の  
カルタ





# 中国帰国者の学びの場

## 高砂日本語教室



### 高砂日本語教室の始まりと**大切**にしていること

高砂日本語教室は、大阪府営高砂住宅に住む中国帰国者の学ぶ場所として2005年に始まりました。週1回、被差別部落にある隣保館で教室を開催しています。いまでは、高砂団地に限らずさまざまなところに住む中国からの人たちの学ぶ場となっています。開設にあたっては、すぐそばにある被差別部落の人たちの協力を得ました。

2011年4月、高砂日本語教室では、「大切にしたい5つのこと」という文書をまとめました。次の5つです。

- ①中国の人が日常生活や仕事に必要な、暮らしに役に立つ日本語を学べる場所です。
  - ②高砂府営住宅がいっそう暮らしやすくなるよう、いろいろな自治活動に参加することを応援します。
  - ③日本語の力に関係なく、誇りをもって生きられるようになることをめざします。
  - ④うまく日本語を話せないと思っている人も安心して来て話せる、居心地のいい場所でありたいです。
  - ⑤そんな目標のために、気持ちや考えを出し合いながら、みんなでいっしょに学ぶ全体学習会をもちます。
- \*だから、「日本語能力試験」などに受かることをおもな目的とする教室ではありません。



新型コロナウイルス感染拡大により教室を開  
催できない時期が続きました。何とか再開でき  
たとき、久しぶりにみんなが集まってどう暮らし  
てきたかを交流しました。そうしてできたのが、  
「コロナ奮闘記」です。作品を一つ紹介します。

迷いのある生活

5月19日に、私が5年間働いた会社から解  
雇されました。仕事をしていた時、体が疲れ  
たので毎日愚痴をこぼしていました。今、仕  
事が急になくなって、私の気持ちは落ち込み  
ました。退職してから今まで、私は終日無  
為に暮らしてしまいました。私の未来はど  
うなるのだろうかと悩みました。時間がある  
時、ひとりで考え込みました。私の人生はこ  
の平凡なまま続きますか。何もしなくもいい  
ですか。最初の夢はどこへ行きましたか。私  
は金を稼ぐために生きていますか。

昨日、ハローワークに行って、そこの職業  
訓練の職員さんと相談しました。職業訓練に  
参加できる最低の要件は日本語をよく喋られ  
ることです。私は面接の機会もないことにな  
ります。

仕事を無くしたのは残念だけど、日本語を  
もっと頑張って、次の仕事も早く見つけたい  
です。



新型コロナで教室が休んでいる間も、特別定額給付金やワクチン接種などで学習者を応援してきましたが、みんなコロナの影響で家の中に閉じこもりがちになりました。でも、「外食をすることが減り、料理の腕が上がった」という話を聞き、「新たに料理に取り組んだ」と作文に書く人もいたので、料理にまつわる話で交流を深めたいと思い、心に残る料理や、大切にしている料理などについてレシピを書いてもらうことにしました。

他の教室で取り組んだ「レシピ集づくり」も参考に、「こんな日には心をこめて」というテーマで、材料・作り方・料理のポイント・この日にこの料理を作るわけ・絵か写真の欄をつくり、記入しました。材料や作り方は簡単

に記入することができたのですが、その料理にまつわる自分の経験をまとめるのに時間がかかりました。「どんな時に食べた?」「誰に作ってあげた?」「味はどうだった?」とそれぞれに細かく聞き取ってようやくまとめることができました。料理によっては中国の地域の習慣によって異なる材料が使われるものもあり、あちこちで話に花が咲き、自然に交流が進みました。スマホの画像を見ながら、料理の絵を描いている人やスマホをかざして学習パートナーに説明している人がい





るなど今までにはない光景が見られました。レシピ通りにできるか自分で事前に作ってみた人や、料理の写真を撮るためにわざわざ作った人もあり、みなでお相伴に預かりました。長い休みの後の緊張した教室の雰囲気が一気に和んだような気がします。

レシピは模造紙に貼り、八尾市のヒューマンフェスタで展示しました。



教室の始まりから高砂府営住宅のそばにある被差別部落に協力を得ていたこともあり、いつかは部落問題学習をしたかったのですが、なかなかできないでいました。

識字・日本語センターによる人権学習モデル教室の事業をきっかけに、取り組むことができました。まず、『わたし、字、ほしいねん』というビデオを見ました。このビデオから被差別部落の識字教室ができたわけ・学習者の思いや願いを知りました。次いで、どのように高砂日本語教室ができ、なぜ隣保館で行われるようになったか、などを説明しました。さらに、地元の小学生と識字教室の学習者が一緒に作った「N 地区カルタ」を使って地域の歴史を学びました。

通訳しながらでなく、DVDやパワーポイントを使い、視覚で補おうと考えました。またわからないときはすぐ質問できる



ように、いつも学習している学習者と学習パートナーが隣同士で座りました。質疑応答の時間には、「なぜ八尾市は N 地区だけほっといたのか」や「なぜ、N 地区は平均寿命が短かったのか」「なぜ貧乏な人が多かったのか」「昔は花緒の仕事、今の仕事は？」などの質問がでました。

「N 地区についてどんなことを聞いたことがあるか」と尋ねると、「日本に来たばかりのころ、会社の社長に、家を借りるなら N 地区や Y 地区はやめた方が良いといわれた」とか、「この教室に通っていると言ったら、N 地区には行かない方がいいといわれた」という話が出ました。学習パートナーとして参加している留学生からは、以前、知人から「あそこ（自分の住んでいる地域）は、外国人が多いから治安が悪いねん」と言われたことがあるという話がでてきました。自分は外国人なので、「私のせいで治安が悪いのか」と言いたいという発言もありました。

2回の学習のあと、次のような感想が出てきました。

部落問題学習に参加する前は、「N 地区に行かない方がいい」と聞いたことがあるので、N 地区と Y 地区が「よくないところ」と思っていました。

わたしが実際の歴史を知らなかったために「ああ、そうなんだ」という印象を持ったのです。それは地域のせいじゃないです。人びとがこの偏見を広めてから差別問題がずっと続いて、消えなかった理由です。

……日本で生活している人は全員わかるようになるほうがいいと思います。



## ボランティアの役割とは？

### ボランティアの役割ってどんなこと？

教室でのボランティアの役割はどんなことでしょうか。一言で言えば、教え込むのではなく、話を聴き、ともに解決に当たろうとすることだと思います。

日本での外国語教育の伝統的な考え方は文法積み上げ型の教育でした。中学校から始まる英語教育をイメージすれば近いでしょう。最近是对話も取り入れられるようになってきましたが、伝統的には「I have a pen.」などから始まって文法の説明があり、主語・動詞・形容詞などを学ぶのです。このやり方では、日常生活に役立つ英語をなかなか身につけられませんでした。

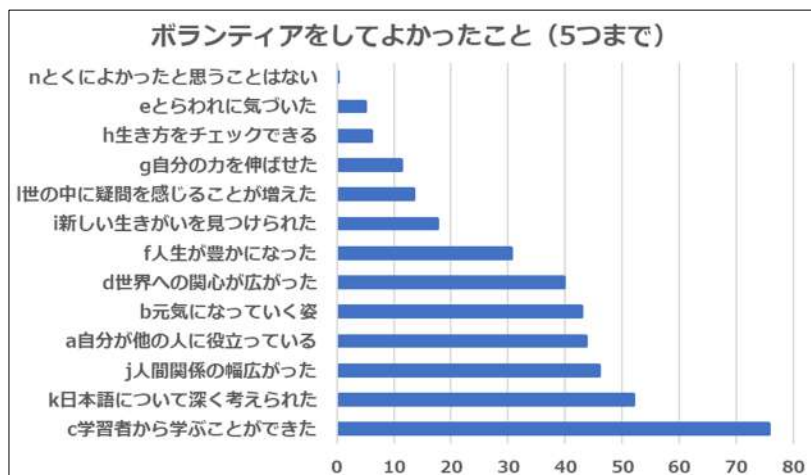
日本語教育にあっても、この考え方は根強くあります。そしてそれは、留学生など、日本語を学ぶために十分な時間があり、自学自習の習慣を持っていて、辞書を調べることができるような人には向いていました。半年ぐらいにわたって週のうち5日間、毎日朝から夕方まで日本語教育を受けられる人です。

ボランティアが中心になって運営している教室では、そのやり方はなじみません。地域の識字・日本語教室で学ぶ人のほとんどは、日本語を学ぶためにとれるのは1週間に2時間程度だけです。その人たちが留学生と同様の文法積み上げ型の学習で日本語を身につけようとするれば、うまくいっても10倍以上かかるでしょう。必要なのは、日常生活



に必要な日本語です。生活に必要なよみかきことばは、やりとりを通して得られる場合が多いものです。

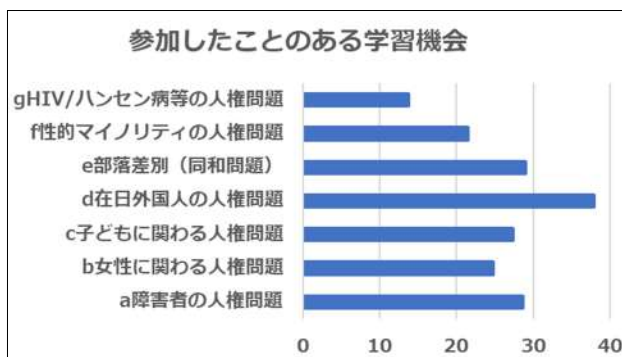
文化庁委託事業として識字・日本語センターが行ったボランティア意識調査によると、「ボランティアをしてよかったこと」として、回答者は「学習者から学ぶことができた」ことを一番多くあげています。



この項目は、4人のうち3人が選んでいます。大阪で活動するボランティアが学習者とのやりとりを大切にしていることを示しています。

一方、少ないのは「とらわれに気づいた」「生き方をチェックできる」「自分の力を伸ばせた」「世の中に疑問を感じるが増えた」です。

同じ調査から、ボランティアの人たちが研修機会を得たことがあるテーマは、次のとおりです。



まず、先ほどのグラフより、このグラフのほうが10%の幅が違っているにご注意ください。先ほどのグラフでは、最も多くの人を選んだ項目「学習者から学ぶことができた」は約75%となっていました。それに対してこちらのグラフでは、最も多くの人が経験した「在日外国人の人権問題」の学習が約38%と4割弱になっています。それ以外の項目はさらに少なく、3割以下となっています。つまり、学習者とのやりとりを大切にしている、人権などについての学習機会が不十分なため、気づいていないさまざまな問題があるかもしれないということです。



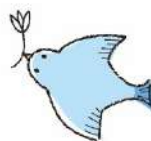
以上のことから、大阪の識字・日本語学習ボランティアは、誠実な態度で学習者に接している人が多いと言えます。ただし、人権学習の機会などを十分に持てていないこともあって、学習者やその家族が直面している問題を捉える力がやや不足しているかもしれません。このあたりについて詳しくは、今後の調査報告に期待してください。なお、グラフに出てきた数字は、現在の所まだ暫定的ですので、ここではあまり細かく数字にこだわっていません。最終的な調査報告で、確かな数字を示す予定です。

このような状況の下でさまざまな人たちが学んでいます。そういう人たちにとって、大阪が暮らしやすい場所となることは、とりもなおさず大阪に住むすべての人にとって暮らしやすくなることではないでしょうか。





# 識字・水平社 100年宣言をつくろう！ しきじ・にほんご天王寺



## 大学がボランティアと協力して運営する教室

「しきじ・にほんご天王寺」は、大阪教育大学が主催して、ボランティアの方たちの協力を得ながら2016年より開設されている教室です。教室では、ボランティアの人たちの思いを土台に趣意書をつくりま



した。趣意書づくりのワークショップでは、それぞれの人の大切にしたいことが出し合われ、出てきた言葉をもとに組み立てていきました。できなかった趣意書では、教室がめざすものについて次のように述べています。

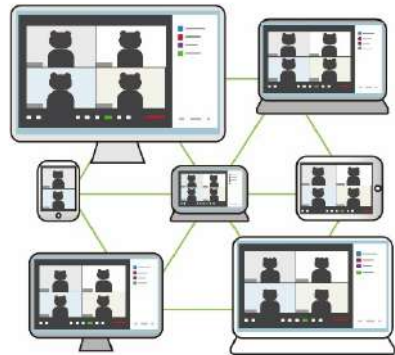
この教室では、地域に住み働き、国籍・年齢など多様な人がともに学ぶことを大切にします。日本社会で「読み書きことば」で困っている人たちが仲間意識を持って集えるコミュニティです。めざすのは、人生をよりゆたかにするための「読み書きことば」の学習であり、検定合格ではありません。言語の壁、制度・文化の壁、心の壁があると言われる。言い換えれば、この三つの壁を越える手助けをするのが、この教室がめざすところだということです。ですから、学習者・ボランティア・大学スタッフの間の対等な関係を大切にします。運営にあたって、「まとめ役」など誰かに過度の負担がかからないように努めます。そのような教室の活動を地道に積み重ねることにより、いつかは、この教室が近辺の教室が抱える悩みの相談にも乗れるような存在になりたいものです。めざすは大阪府内にある識字・日本語教室のキーステーションです。



教室に来ていたのは、夜間中学の卒業生、最近日本に来た人、結婚して日本に住んでいる人など約40人ほどです。ところが2020年になると、新型コロナウイルス感染症の影響で、教室を開くことができなくなりました。ボランティ

アからの提案で、オンラインによる教室を始めることになりました。2020年10月頃からオンラインの教室は始まりました。まん延防止等重点措置や緊急事態宣言が出ているときも、オンラインの教室は開かれました。それからずっとオンラインの教室が続けられました。留学生を中心とする大阪教育大学生の参加も得られました。2022年4月からは対面の教室とオンライン、郵便による通信制の活動が続けることになっています。

オンラインの教室が開かれたことで、学習を続けることができた人たちがいます。パソコンが使える人や日本語での会話がある程度できる人はオンラインの教室にも参加できたようです。また、オンラインの教室でのやり方もいろいろと編み出され



ました。オンラインでは、学習者1～2人とボランティア2～4人で一つのグループになり学習するのですが、学習者もボランティアも、それぞれが話題を持って参加し、10分程度の時間をとってそれぞれが話題提供して話し合いながら学習するようになったという例もありました。また、おしゃべり中心に、最近あったことをどんどん話すというグループもありました。こちらのグループでは、おいしい中華料理や韓国料理のお店を紹介し合うような話をしたりしました。こうした活動からは、オンライン教室の

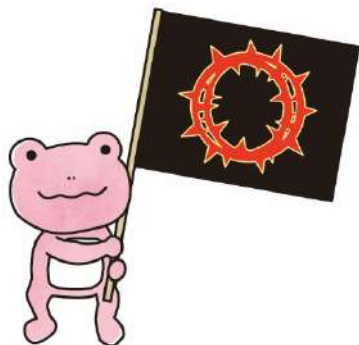
可能性を考えることができます。

けれども、夜間中学の卒業生を始め、パソコンなどに慣れていない人は、オンラインの教室に参加し続けることはできませんでした。対面の教室が行われていたときには、学習者の3分の1が夜間中学の卒業生でしたが、オンラインになってからは夜間中学の卒業生はほぼ参加できなくなりました。後に紹介する部落問題学習などを進めるうえで、夜間中学の卒業生の経験や知識は大いに役立ったであろうことを考えると、この点は残念でなりません。今後の課題とする必要があります。



2021年、教室では、部落問題学習の一環として、「識字・水平社100年宣言をつくろう!」という学習をしました。2022年は全国水平社ができて100周年です。この100年の間に差別をなくそうとさまざまな活動や事業が行われてきました。それでも残念ながら差別はなくなっていない。水平社宣言を参考に自分たちの人生をふりかえり、そこからいまの差別をとらえなおして、これからの取り組みを考えようとするのです。その内容を宣言の形にまとめようというのが、「識字・水平社100年

宣言」づくりです。これもオンラインで行いました。



最初に「差別」という言葉の意味や、「水平社」という言葉の意味を確認しました。オンラインでの学習なので、特に、こういう基礎的な概念はあらかじめいねいに整理しておいた方がよ

いと考えました。その上で、水平社宣言の内容について「自分たちは差別され、こんな悔しい思いをしてきた。だからこういう団体をつくって、差別をなくするために取り組むのだ。一緒に取り組みましょう」と呼びかける文章だということだけを説明しました。

その後、この頁にあるワークシートを使ってそれぞれの人に体験をふりかえってもらいました。

学習者やボランティア、参加していた留学生などから、それぞれの経験が出されました。コンビニで働いていて「日本語のわかる店長を出せ」と言われた。子どもの頃に女だからと後回しにされたので、自分が子育てするときには女の子にそんな思いはさせないようにした。職場で学歴により差別された。いろいろな体験が出されました。ここから「識字・水平社 100 年宣言」につないでいこうとするところまでで学習を終えました。

<small>し き じ</small> <small>すいへいしゃ</small> <small>ねんせんげん</small> <small>くや</small> <small>たいげん</small> <b>「識字・水平社100年宣言」わたしの悔しかった体験をふりかえる</b>	
<small>すいへいしゃせんげん</small> 水平社宣言のポイント	<small>たいげん</small> わたしの体験(そのときの気持ちは?)
★「いちいちいわなければいいのに」 「おとなしくしてれば、 わるいようにはしない」 「うるさい」、「だまれ」 と言われたことは?	
★「きみは〇〇だからねえ」 「あなた(おまえ)のせいだ」 「〇〇のくせに」 「ここにるのがまちがい」 などと言われたことは?	
★「わがまま」 「ずるい」 「こちらが逆に差別されてる」 などと言われたことは?	

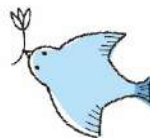
\*どう言い返したでしょう? 味方になってくれる人はいましたか?

ワークシート





## 教室はふたつめの家族 日之出よみかき教室(木曜日)



日之出よみかき教室(木曜日)は、大阪市内にある被差別部落の識字教室です。解放会館の竣工とともに1970年に始まり、現在まで続いています。その後、2000年以後になると解放会館などいろいろな地域施設の廃館にともない、場所を移動してきました。いまは、週1回、中学校の市民に開放された教室で開催しています。



参加者は、学習者、学習パートナーともにいろいろです。年齢もいろいろなひとが集ってお互いに学び合っています。学習パートナーとして、かつては学校教員が中心に関わっていましたが、いまは学校関係者はおらず、市民ボランティアが運営しています。

学習は日々のくらしのなかのすることをおしゃべりしながらすすめています。たとえば、ニュースを見ていて「なぜ?」と思ったことや、役所からの書類でわからないものを持ち寄ったりします。障害福祉に関わる書類の書き方、子どものこと、仕事のこと、住宅のことなど困ったり悩んだりしていることを安心して話せる教室づくりをめざしています。

また、部落解放運動に携わっている活動家に来てもらい、部落問題学習なども行っています。歴史や用語の説明などの学習ではなく、語り手の生き立ちを通じて、教室参加者の生まれ育った国や地域での経験を重ね合わせながら話し合う学習スタイルです。

そんな学習活動のなかから生まれた作品をふたつ紹介します。







ひとつは、新型コロナウイルス感染が拡大するもつで、どのような体験をしたかを話し合ったりつづったりする学習です。これは、別の教室の「コロナ奮闘記」という取り組みに学んで行いました。

ここでは、学習者の一人、Aさんの作品を紹介します。

### コロナ禍での学び

コロナが流行ってから、私の生活だけではなく皆の生活が影響を受けていると思います。今まで4年ぐらい日本に住んでいます。以前、3ヶ月に1回ベトナムへ帰っていました。だから息子と離れて暮らす時間はあまり長くはありませんでした。けれどもコロナが流行って以来2年間ぐらいベトナムに帰らなくて直接息子に会えなかったです。

毎日フェイスブックで息子と話しています。  
息子と話すと「パパ你们でバトナムへ帰らない  
の？何で会いたくないの？何ですって日本に  
住んでいるの」と聞かれました。毎回息子が  
そんな質問を聞かれたらとても寂しいで  
す。帰国できるものならすぐ帰国したいと思  
いますがバトナムもコロナでロックダウン中  
なので入国したら3週間ぐらい隔離しないと  
いけないです。だから今まだ帰国しなれません。  
息子が恋しくてストレスがだんだんたまっています。

母が亡くなった日はベトナムでロックダウン中なので、お葬式も行えなかったです。それでお葬式はオンラインでやりました。こんなことを考えたことないですが、今やっています。私の家族だけではなく他の家族もそうになっていると思います。

教室の人は私に「お母さんはAさんが幸せなのが一番嬉しいと思うので、幸せに過ごすのが親孝行だと思います」と言いました。聞いてからはもっと頑張らないといけないと自分に言っていました。



教室では、被差別部落に生まれ育った人などを招いて話を聴いたりしています。話を聴いて、みんなが自分の体験したことを出し合ったりしてきました。「差別ってわかりますか?」という質問に対して「わかりますよ!」と強い調子で答

え、自分の被差別体験をいくつもあげた人がいました。子どもの頃から、親の仕事やルーツで差別されてきたという人もいました。また、学校での体験を話した人もいました。海外から来た人は、それぞれの国に同じような差別があるのかと尋ねられて、答えました。ベトナムには、民族差別で部落差別と同じような結婚差別があるそうです。韓国からの人は、ペクチョンに対する差別があると言っていました。それぞれ、今なお差別があるとのこと。この学習をしてみて、「部落問題学習は識字学習者には無理」とか「部落差別は外国人にはわかりにくい」「学びたいこととは異なる」という声も聞かれますが、決してそうではないということが改めてわかりました。逆に、文字を読み書きできる日本生まれの人でも、「部落問題はわからない」という人はたくさんいますよね。

2022 年は全国水平社創立 100 周年です。設立時にできた水平社宣言は、日本で最初の人権宣言だと言われます。「差別されてもだまっていなさい」「あなたの方に責任があるんだ」「自分たちのことだけ考えてずるい」など、今にも通じる差別に関わるさまざまな問題を捉え、「吾等の中より人間を尊敬する事によって自ら解放せんとする者の集團運動を起せるは、寧ろ



必然である」、「吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ」「人の世に熱あれ、人間に光あれ」とうたっています。この宣言は、100年前にできたものですが、残念ながら今なおある、さまざまな差別からの解放に通じる内容です。また、その解決へのヒントも書かれています。

教室のみんなで宣言について学習し、水平社宣言に重ねて「わたしの水平社宣言」を書きました。高校に行けなかったのが悔しかったと書く人、日本に来て職場でくやしい思いをしたと書く人、子どもの頃にきょうだいと比べられた体験について書く人、部落解放運動の延長線上に保育所で地区内外すべての子どもの給食を無償にしたという話を書く人など、さまざまな体験がつづられました。Aさんは、職場での体験を書くとともに、教室で体験を交流したことをふりかえっています。

すいへいしゃ せんげん  
私の水平社宣言


30年<sup>前</sup>たう 人をみて しゃべるときに 自分<sup>の</sup>下を みる<sup>ふ</sup>たいに ことば  
づがい<sup>が</sup> あうかた<sup>の</sup>ご ころに きづが のころ<sup>く</sup>らい むねが いたかた<sup>で</sup>ず。  
おとが はやく<sup>な</sup>くなつた<sup>の</sup>で いきる<sup>た</sup>めに 仕事を はじめ<sup>し</sup>ましたが なかな<sup>が</sup>  
仕事を もらえ<sup>ま</sup>せんでした。

なれる<sup>ま</sup>で たいへん<sup>で</sup>したが 3年<sup>く</sup>らい がんば<sup>り</sup>ました。わかい<sup>人</sup>にも べ<sup>い</sup>どい  
ことを いわれ<sup>た</sup>ことは 今も わちれ<sup>ら</sup>れま<sup>せ</sup>ん。

さいきん<sup>で</sup>は よみかき きょうしつ<sup>に</sup>に かいせ<sup>か</sup>いの 人<sup>た</sup>ちと いろいろ<sup>な</sup>話を ち<sup>ろ</sup>  
な<sup>が</sup>で 私<sup>だ</sup>け<sup>で</sup>は なく それぞ<sup>れ</sup>に さべつ<sup>や</sup> いじめ<sup>に</sup> な<sup>や</sup>んで<sup>い</sup>る こと<sup>も</sup>  
し<sup>り</sup>ました。これ<sup>が</sup>う<sup>も</sup> 心<sup>を</sup> つよく<sup>さ</sup>せる よみかき きょうしつ<sup>に</sup>に も<sup>と</sup>  
がんば<sup>っ</sup>て かい<sup>い</sup> 日本<sup>の</sup> ぶん<sup>か</sup>や ことば<sup>の</sup> いみ<sup>を</sup> よく<sup>り</sup>かい<sup>ど</sup>きる  
ように べんき<sup>う</sup>したいと おも<sup>い</sup>ま<sup>う</sup>。

22.2.3

人の世に熱あれ、人間に光あれ



これらを出発点にしながら、これから「識字・水平社 100 年宣言」をまとめていくという計画です。全国各地にある他の教室と連携しつつ、それぞれの思いを宣言に託したいと考えています。

## 識字・日本語学習における 「居場所・出番・物語」

森 実

あちこちの識字・日本語教室でようすを聴いていると、繰り返し出てくるポイントがあるように思えます。それらを一言にまとめると、「居場所・出番・物語」になるのではないのでしょうか。

### 教え込み・覚え込みの問題点

識字・日本語教室で「学習者のニーズに応える」ということがあります。これは大切なことです。ただし、これは、学習者本人の言っている学習をそのまま進めればよいという意味ではありません。

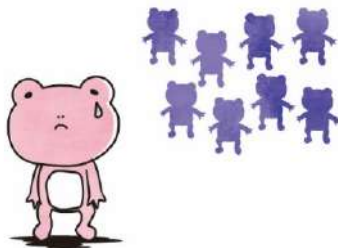
教室に来て、「パソコンを学びたい」という人がいました。ところが、その人のいまの力ではパソコンのキーボードを打つことが難しいとわかりました。しかも、その人がパソコンを学びたいと言ったのは、パソコンを使えないばかりに職場を解雇されたからだとわかってきました。そうだとすれば、その人にとって必要なのは、少しでも安定した仕事に就けるよう応援することだということになります。



また、海外から来た人で、「N2の試験に受かりたい」という学習者がいました。N2というのは、日本語能力試験で上から二番目の資格を示



しています。よく聞いてみると、その人が困っているのは周りの人とのコミュニケーションでした。ゆっくりやりとりすれば十分に対話できるのに、周りの人に聴く姿勢がなかったのです。



このように、その学習者がくらしの中で直面しているのはどんな問題か、雑談などを通して確かめながら、学習を組み立てるべきです。

「よみかきことば」は空気のようなものです。「よみかきことば」が十分できない人には、日常生活を送ることそれ自体が、息苦しい、窒息しそうな体験となりやすいものです。仕事、子育て、病気など、さまざまな困りごとが「よみかきことば」の問題と感じられるのです。だから、「よみかきことば」の学習は、しかるべく組み立てられれば、くらしの中で出てくるさまざまな課題の解決に通じます。

「学習者のニーズに応えて」というとき、その人が自分で言っていない、さまざまな課題を抱えていることを想定して、それらを引き出し、受けとめようとするのが大切です。本人がはっきり言っていることは「ニーズ」(必要)ではなく「ウォンツ」(要求)です。わたしたちの課題は、はっきりと主張されていることの土台にある本当の願い(ニーズ)を探ることです。



そのためには、人間とはどういう存在であり、何を求めて生きているのかということを考える必要があります。ここで参考になるのが、「居場所・出番・物語」ということばです。



## 居場所・出番・物語を参考に

「居場所・出番・物語」というのは、桂正孝さんが、大切にすべき事柄として提案されている言葉です。どのような教育活動にあっても、いや誰の人生にあっても、「居場所・出番・物語」の三つは不可欠です。識字・日本語学習にあってはなおさらだといえます。識字・日本語教室に参加している人たちは、これまでの人生で「居場所」を奪われ、「出番」を遮られ、ともすれば「負の物語」を強いられることが多かったからです。

学習の場で、自分にあって意味のわからないようなことばかりを覚えるよう求められては、しんどくなりやすいでしょう。それよりも自己の内に封じ込められたものを解き放つ。つまり自己解放を基礎に据えた学習を組み立てるべきだと思うのです。

識字・日本語学習者の人生には語るべき物語が

たくさん詰まっています。ただし、それは、他の人に聴いてほしいが、同時に誰にも知られたくない物語でもあります。何かがうまくいかないとき、社会が「責任はあなた自身にある」というメッセージを学習者に投げかけてきます。そのため、そうした経験をみずから「負の物語」として心の



奥底に封じ込めることさえあります。語ればまた「負」の烙印を押されます。だから、それらが「自然に」語られることはほとんどない。では、どうすればそれが語られ、つづられるようになるのでしょうか。

## 「負の物語」に新しい命を吹き込む

不可欠なのは、学習者のそのような体験を「負の物語」としてしまいうな世の中の価値観をひっくり返す力です。教室が単独でそのような性格を備えることもできます。

たとえば、不登校や高校退学が増えています。そのなかには、貧困をはじめさまざまな困難をもつ人たちがいます。ところが、最近では「自己責任」論が強まっており、「困っている本人に責任がある」といいます。このような世の中では、自分の生活状況が、社会構造によって発生しているととらえ直せるようになることが必要です。

学校も、ときには人を追い込む大きな原因となります。学校は、一方で子どもの可能性を広げますが、他方で制度として競争をあおります。だから、不登校や高校退学を経験した人が識字・日本語教室に来ているなら、いきなり受験勉強などを強いることは避けるべきです。

## 「居場所・出番・物語」の連鎖

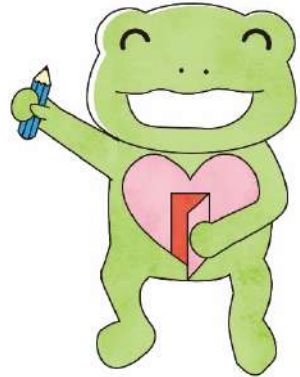
「負の物語」を強いられてきた学習者にとってまず必要なのは「居場所」です。学習者はひとりひとり、仕事に励んできたり、子育てに専心したり、家族を支えたりしてきました。「居場所」とは、そのことを受け止められる場をさしています。自分が素のままでいても、否定される心配が

ない場所です。また、学習者の多くは生活の困難や不利益を被ってきています。そのような生活相談に乗り、問題解決に当たることは教室が「居場所」となる上で重要な意味をもちます。

もうひとつ求められるのは「出番」です。自分が培ってきた個性やスキルを発揮できる機会があれば、自分をいっそう伸ばすことができます。出番はいろいろなところに待っています。全体学習会で司会をする。共同制作の作品をみんなといっしょにつくる。他の学習者やボランティアを支える。地域のお祭りなどで教室として出し物をする。ふさわしい「出番」を作り出すために、特定の学習者を意識して、その人の持つ魅力を引き出せるような活動を位置づけることも必要となるでしょう。

こうして準備が整ってくれば、「物語」は生まれてきます。

ここで言う「物語」とは、ひとつにはその人の生い立ちや人生経験などです。人生をつづることがすなわち物語を生み出すことでもあります。教室での人権学習の一環として、さまざまな差別について学ぶことにより、自分の人生が違って見えてくることがあります。ときには親に対する思いが変化するので、教室で喜びや達成感を共有する機会が繰り返されるなかで、「ここならあの体験を出せる、この人たちには伝えたい、聴いてくれるだろう」と思うようになるのではないのでしょうか。



「物語」のもう一つの意味は、ともに活動をするなかで共通の体験が生まれていくことそのものを指しています。一緒に作品を作るなかで信頼関係が深まり、共感が広がります。そのようにして、新しい体験が生まれること自体が「物語」のもう一つの意味だといえます。



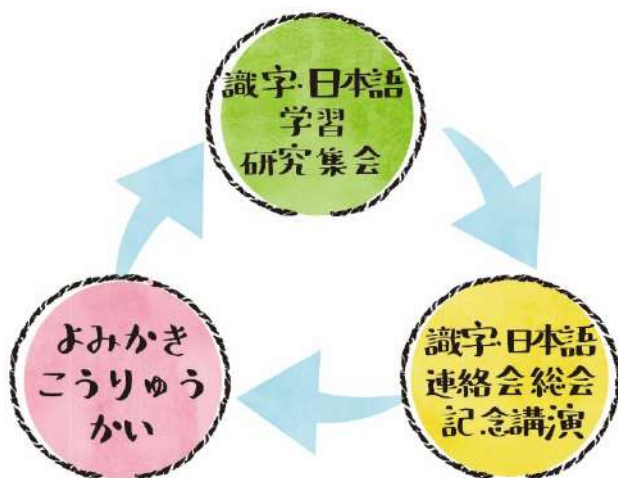
### 三者が一体となって豊かに

「居場所・出番・物語」は、らせん状につながり、発展していくものです。最初は自分の得意なことを発揮するだけでも構いません。しかし、そのことによって社会の見え方が深くなれば、次の「出番」では、多くの人の前で自分の物語を語ることになるかもしれません。ひいては、自分が受けてきた差別など悔しかった体験を世の中に訴え、自分たちの政治的権利を主張することにもむすびついていくでしょう。こうして学習者は自分自身の社会的立場を引き受けていくのです。この冊子で紹介している人たちは、確実にそのような道を歩んでいるといえます。

## 識字・日本語センターとは？

識字・日本語センターは、識字・日本語学習について情報を集めたり、教材や情報を提供したりするセンターです。2002 年に立ち上がり、大阪府・大阪市・堺市が共同で運営していました。その後、残念ながら自治体の予算は出されなくなりました。現在は識字・日本語連絡会など市民団体が中心になり、大阪府・大阪市・堺市など自治体の協力のもと運営しています。

### 大阪府内の識字・日本語学習活動に関わる毎年のおもな集まり



イベント講座のお知らせは、識字・日本語センターWEB サイト、フェイスブックをご覧ください。

#### ●ウェブサイト

識字・日本語センター

検索



<http://call-jsl.jp/>

#### ●フェイスブックページ

<https://www.facebook.com/call.jslo>



## おわりに

この冊子は、「はじめに」でもふれたとおり、文化庁の「令和 3（2021）年度『生活者としての外国人』のための日本語教育事業地域日本語教育実践プログラム（C）」により識字・日本語センターが実施した「教室ボランティアの人権意識調査に基づく学習・研修プログラムづくり」という事業の一環として作成されました。

同事業では、1）ボランティアの人権意識調査、2）人権学習プログラムづくりワークショップ、3）人権学習モデル教室の 3 つを行ってきました。この冊子では、いくつかの論考とともに、協力していただいた教室の紹介と、それぞれの教室で取り組まれた活動を取り上げています。

大阪では、2019 年に開催された「だい 30 かいよみかきこうりゅうかい」で発生した差別事象が一つのきっかけとなって、それぞれの教室や市民団体、行政などが、自分たちの事業を洗い直し、さまざまな取り組みを始めました。この事業もその一つです。

文化庁からは、地域日本語教室における人権意識をめぐる問題状況を受けとめて、この事業の意義を認め、報告をまとめるにあたって、多くの人たちにわかりやすいよう発信してほしいというアドバイスをいただきました。

なお、冊子の最後に掲載した「識字・日本語学習における居場所・出番・物語」という文章は、雑誌『ヒューマンライツ』第 408 号（2022 年 3 月）に掲載された森実の文章をもとにしています。

最後になりますが、文化庁の方たち、事業に協力くださった教室の方たち、調査に答えてくださったボランティアの方たち、ご協力いただいた市民団体や行政の方たちに感謝して、冊子を閉じたいと思います。

識字・日本語センター会長 森 実



## ◎編著

菅原智恵美(すがわら ちえみ)

日之出よみかき教室(木曜日)

識字・日本語センター 事務局次長

大阪市立大学人権問題研究センター特別研究員

森 実(もり みのる)

識字・日本語センター 会長

大阪教育大学名誉教授

## ◎協力 (五十音順)

岡田耕治 しきじ・にほんご天王寺

友永健吾 住吉輪読会(土曜日)

平野和美 高砂日本語教室

細見新市 加島識字学級

丸山敏夫 浅香識字・日本語教室

識字・日本語センター事務局長

\*本冊子は、文化庁の「令和 3(2021) 年度『生活者としての外国人』のための日本語教育事業地域日本語教育実践プログラム(C)」により識字・日本語センターが実施した「教室ボランティアの人権意識調査に基づく学習・研修プログラムづくり」という事業の一環として発行しています。



## 教室は、ふたつめの家族

識字・日本語学習における居場所・出番・物語

---

編集: 識字・日本語センター

発行日: 2022 年 3 月 8 日

住所: 大阪市港区波除 4-1-37HRC ビル 9F

URL : <https://call-jsl.jp/>